願いの魔法
～Before The Storm～（上）

赤い死神

目次

プロローグ　昏い火種　1
第一章　夏の始まり　3

プロローグ　昏い火種

魔法帝国日本。
かつて起った世界大戦において、並み居る強国を打ち倒し、世界の頂点に立っていた国の名である。
その名の通り、日本には――いや、日本人には他国の人間が誰一人として持ち得ない魔法という技能を持っている。日本人のみが生まれながらに持っている魔力を用いて行使する魔法という技能は、他国と日本との技術差を容易に埋め尽くし、圧倒できるほど強力なものであった。
日本一国で、世界の全てを敵に回せるほどに。
だが日本と言う国は支配ではなく共存へとその姿勢を変えた。当時の皇帝、ヴィンセント・レナミスの決断によって。そして、その姿勢を受け継ぎ、現在日本を治めているのがその息子であるカーネル・レナミスである。
この決断は、当時多くの者達に糾弾された。
それだけの力を持ちながら、何故他国と並ぶ必要があるのか。
この世界で、日本人だけが魔法という技能を持ち得るのは、自分達が選ばれた民だからだ。
弱者が強者に付き従うのは当然のことだ。
などと、多くの声が上がった。
しかし、ヴィンセント・レナミスが決定を覆すことはなく、日本は多くの国と親交を深めることになった。
その結果として、他国と比べて数世紀近く遅れていた日本の技術は大きく進歩し、また様々な国の人々と交わることによって、多種多様な価値観が生まれ始めていた。
無論、それが全ていいことであるとは言い切れないが、次第に国民達はヴィンセント・レナミスの決断を受け入れ、同時に他国の技術や人々を受け入れるようになり、日本という国はかつてないほどに大きく発展を遂げることになったのである。
……だが、
それでもなお、力を持って生まれてしまった人の性とでも言うべきか、
未だに日本が他国と共存していることに不満を持つ人間も少なからずいるのだった。

＊　＊　＊

「父上。そのようなこと、本気で仰っているのですか？」
外界の音が一切入り込むことのない、静寂に包まれた一室。ただ立っているだけで伝わってくる荘厳な雰囲気に、多くのものは頭を垂れ畏怖を感じることだろう。
だが、この部屋の主である初老の男性に向けて声を上げた青年は、臆した様子もなく、ただ真っ直ぐに男性へと目を向けていた。
「そのつもりだ」
青年に背中を向けたまま、窓の向こうに見える街並みを見下ろす男性が低く威厳に満ちた声で答える。
「私の後を、お前に継がせるつもりはない」

「何故ですか！　父上は私の何が一体不満なのだというのですか！」
「お前の思想はもはや、この国にとって毒でしかないのだ」
振り返った男性は、青年を諌めるように見る。対する青年は、それを無視するように声を荒げた。
「私は何も間違ってはおりません！　何故我が国が他国と肩を並べて生きねばならぬのです！　我が国の力を持ってすれば、今からでもまた世界を支配することなど容易なはず！」
「今のこの平和な世に、何故争いを持ち込む。多くの者の命を無駄にし、平和を壊してまで、世界の支配などというものを得る価値などない」
「何を甘いことを――」
「とにかく、もう決まったことだ。臣下の者達にも伝えてある」
「……そう、ですか」
青年は諦めたように肩を落とし、男性に向かって背を向ける。そのまま一歩を踏み出し、振り返ることなく訊ねる。
「国民へはいつ発表を？」
「もうじき我が国にも国営のテレビ放送局が設立される。その時に」
「なるほど……わかりました。納得はできませんが、父上の決定であれば受け入れるほかありませんね」
そう言って、青年は部屋を後にする。
その目に、隠しきれない昏い炎を宿して……

第一章　夏の始まり

季節は夏。暦は七月を迎え、梅雨のじめじめとした空気は吹き飛び、カラッとした暑さに包まれ、アーレント魔法学園に通う学生達は、衣替えを経て、夏服に身を包み学園へと登校していた。

「ふわあ……あふ……」

大きく欠伸をしながら、眠そうに瞼をこする少年、風見俊介もその一人である。冬服に比べて生地の薄くなった白ズボンと半袖のカッターシャツがアーレント魔法学園における男子の夏服だった。

とは言っても、冬服も上下白を基調としたものだったので、見た目にはあまり変わったようには見えない。

「もう、俊ちゃんってば、だらしないよ」

その隣を歩く少女は、俊介の妹である風見千里である。こちらも、白のブレザーがブラウスに変わっただけなので、やはり冬服の頃とあまり受ける印象は変わらない。

「つってもな……朝は眠いもんだろ？」

「そんなことないよ。わたしはちゃんと起きてるもん」

見た目に受ける印象が変わらないように、登校する二人の様子はいつもと同じ。面倒臭そうに歩く俊介とは対照的に、千里の足取りは軽く、長い黒髪を揺らしながら楽しそうな笑みを俊介へと向けている。

「ったく、このクソ暑いのに元気だよな、千里」

「文句言っちゃ駄目だよ。夏は暑いものなんだよ、俊ちゃん」

「んなことはわかってるけどよ……暑いもんは暑いだろ……」

「暑い暑いって言ってるから暑いんだよ。ほら、何て言ったっけ？　心頭滅却すれば火もまた涼しい、だっけ？」

「んな精神論に頼るぐらいだったら、学校に行ってレイに冷風でも送ってもらう方がいいだろ」

「だったら早く学校に行こうよ。きっともう藤原君達教室に来てるよ」

ぐったりと肩を落としながらも、足を止めるわけには行かないのでそのまま学校へと向かう。

「あー……水か風の魔法が使える奴が羨ましいぜ……」

自分達と同じように学園に向かって歩く学生達の中には、俊介のように暑さにやられてぐったりとしている者と、平然として歩いている者の二種類に分かれていた。後者に関しては、単純に我慢しているだけの者もいるだろうが、多くは魔法を使って涼を取っている者達だろう。

魔法は火、水、地、風、光、闇の六つの系統いずれかに属しており、基本的に一人が扱える属性は一つ、ないし二つ程度である。これは生まれつき決まっており、完全な先天的な才能になる。いくら努力しようとも、扱える系統が増えることはありえない。

水や風の魔法を使えば、この暑さを和らげられるのだが、残念ながら俊介の系統は光、千里の系統は闇である。どう使っても涼を取ることはできない。

「あれ？　でも、俊ちゃんって確か水とか風の魔法も使えるんじゃなかったっけ？」

「あー、前にもらったやつがあるにはあるんだけどな……」

腰に下げた目映く銀色に光る二丁のリボルバーを抜く。
魔法は使用者の想像によって生まれる。その想像の指向性をはっきりと持つために、魔法使いは何かしらの道具を用いることが多い。それを魔術媒介といい、俊介の場合はそのリボルバーである。俊介の攻撃的な性格上、敵を倒すための武器が一番魔法をイメージしやすいのだ。
「えっと、確かその魔法具が俊ちゃんの魔力を水と風に変換してくれるんだよね？」
銀色の銃身に不似合いな、緑と青の弾倉を指さしながら千里が言う。
「だったら、それを使えば俊ちゃんだって涼しい風とか起こせるんじゃないの？」
「オレもそれは思ったから、一度試して見たんだけどな……」
言いながら、二丁の銃を腰に下げたホルスターに直す。
「やってみたら、冷風どころか吹雪が起ってよ……体が半分凍っちまったんだよ……」
「えーと……」
「どうにもオレの魔法ってのは攻撃的にできすぎててよ、そう言う細かいのには向かねえみたいだ」
「それはちょっと加減すればいいだけだと思うんだけどなあ……」
苦笑いを浮かべる千里に「苦手なんだよ」と言って目を逸らす。
「それじゃあ、ほら。早く学校に行こうよ。藤原君や中田君ならそういうの得意だよ」
「学校なあ……教室は今別の意味で暑いんだけどな……」
ここ一週間ばかり続いている光景を思い浮かべるだけで、胸焼けがしそうになる。
それというのも、つい一週間ほど前のことだ。俊介達のクラスに転校生がやってきたのだ。
名前は茜澤絵里香。異性にあまり興味のない俊介からみても十分に美人で、性格も温厚な上に茜澤家といういわゆる名家のご令嬢。育ちのせいか振る舞いには気品を感じられ、年上の女性が持つような、包み込む優しさを身に纏っていた。
もっとも、実際に絵里香は俊介達よりも一つではあるが年上なのだが、レイ曰く『権力とは便利な物だ』ということで、二年生の教室に転校してくることができたとかなんとか。
アイという前例があるとはいえ、それで半分以上納得できてしまう自分も、いい加減毒されて来ているなと思わないでもない。
ともかく、そんな大和撫子を絵に描いたような絵里香が、何故わざわざ俊介達のクラスに転校してきたのは、彼女の思い人が俊介達のクラスにいたからだ。
好きな人と一緒にいるために、無理を通して転校してきた。
それだけならばまあ、美談とも純情な乙女心とでも言えるかもしれないのだが……
「ああ、絵里香さん。今日もとても綺麗だ……億万の薔薇の花束よりも、貴方の方がずっと美しいよ……」
「いやだわ、キースさんったら、またそんなことお世辞を言って」
「お世辞なんかじゃないさ。ボクは心からそう思っているのだから」
「キースさん……」
「絵里香さん……」
と、こんな感じで毎日のように教室でイチャつかれていると、そんな光景を見せられる方はたまった物じゃない。

周囲の目を気にすることなく、歯の浮くような台詞を吐くキースもキースだが、それを平然と受け入れている絵里香も絵里香である。まさに絵に描いたようなバカップルっぷりが、毎日毎日展開されているのだ。

「……はあ。またやってやがる」

教室に着くなりその光景を目にしてため息をつく。胸焼けなどとっくに通り越していて呆れてしまう。吐いたため息には多分に諦めが混じっていた。

「あはは、今日も仲いいね、キース君と茜澤さん」

何をする出もなく、ただお互いを見つめ合う二人を見ながら千里はのほほんと笑っているのだが……

「くそっ……なんでキースの奴とあんないい人が……」

「納得いかねえ……納得いかねえぞ、ちくしょう!」

そんな無邪気な千里の笑顔とは対照的に、教室にいるほとんどの男子が嫉妬の目でキースを睨み付けており、キースと絵里香の周りを覗いて教室の空気は黒々と変色してしまっていた。

「まあ……気持ちはわからなくもないけどな」

キースに対して嫉妬しているというわけではなく、過程を知らなければ俊介も他のクラスメイト達と同じような疑問を抱いていたことだろう。

何せ、容姿はとりあえず置いておくとしても、性格的に問題だらけのキースだ。そんなキースに、彼女が出来る日が来ることなど、少なくともこのクラスの人間は誰も想像していなかっただろう。

「ん……おっと、これは風見と千里クンじゃないか。おはよう、どうしたんだい？　こっちをじっと見て？　ああ、そうか。ボク達の仲睦まじい様を見て羨んでいたのかい？　いやあ、照れるなあ」

見ているだけで腹が立ってくるほどにやけた顔で、こちらを見てくるキース。

「でも、ホントに仲いいよね、二人とも。ちょっと羨ましいよ」

「ははっ。それなら千里クンも誰か恋人を作るといいよ。残念ながらボクはもう絵里香さん一人の物になってしまったけど、千里クンほど可愛ければ恋人なんて簡単に出きるさ」

「お前な……人の妹に何吹き込んでやがる」

「何って、幸せになる方法さ。今やボクは君と違って彼女持ちだからね。恋愛の先輩としてちょっとしたアドバイスをしてあげただけさ」

「今ののどこがアドバイスだよ。ったく、おい、千里来い。こんな色ボケと付き合ってられるか」

「え、あ、わわっ、俊ちゃん。引っ張らないでよ」

「ふっ、逃げるか、風見」

「好きに言ってろ」

何て言うと、「はっはっは、ついに風見がボクに負けを認める日が来たぞ!」なんて高笑いを上げ出したので、途中で殴りに戻りたくなりつつも、聞こえないふりでその場を離れる事にした。

「……朝から大変だな、風見も」

「あー……健一か。おはよう」

「中田君。おはよう」

クラスメイト兼友人である健一が、避難してきた俊介達を心なしかぐったりした顔で出迎える。大方、キースと絵里香のイチャつき振りに当てられたんだろう。
「一週間も経てば少しは熱が冷めると思ったんだがな……」
結果は見ての通り、絵里香が転校してきてから一切変わらず、二人は……というか、主にキースは、周りなど見えてないかのように甘い言葉を吐き続けている。
「あの二人が付き合おうがイチャつこうがどうでもいいけどよ……せめて教室ではおとなしくしてろって話だよな……」
「恋をすると周りが見えないというのは本当らしいな……まさかこれほどとは……」
「えー、でもでも、二人ともとっても幸せそうだよ」
「お前はもうちょっと周りを見てみろよな……」
お前には嫉妬にくらむ、あるいは机に突っ伏している男子連中が見えないのかと。……多分、見えてないんだろうが。
「キース君が言ったみたいに、わたしも誰かと付き合ったらあんな風になるのかな?」
「できればやめて欲しい所だな……あんなのがクラスに二組もできあがるなんて、考えただけでも胸焼けしそうだ……」
「あのバカの言った事なんか真に受けてんじゃねえよ。つーか、あれは明らかに特殊な例だろ。付き合った人間が全員あんなのになるっつーなら、オレは絶対恋愛なんかしねえぞ……」
「風見様でしたらちゃんと折り目を付けてお付き合いできますわ。ですからどうぞ、躊躇わずに私の手を取ってくださいませ、風見様」
「あー……また鬱陶しいやつが……」
いつの間に隣に来ていたのか、瑠璃色の瞳をキラキラと輝かせたアイが、俊介の方へと手をさしのべていた。その手をにべもなくはたく。
「あん、もう、風見様ったら、相変わらずつれないですわ」
頬をふくらませ、プイッとそっぽ向く。それにつられて、縦にロールの掛かった黄色の髪が上下に揺れる。
「やれやれ、今日も素っ気ないな、シュンよ。たまには妹の好意に応えてやって欲しいものだがな」
フッと笑いながらまた一人、男子生徒が俊介達の輪の中に入ってくる。さっき入ってきたアイの兄にして、俊介の悪友である藤原レイである。肩の上には使い魔である黒猫のエカテリーナの姿がある。
「今のに応えてたら速攻で付き合うハメになるじゃねえか」
「ん? 何か問題でもあるのか?」
「どう見ても問題しかねえだろ」
「何をバカな。アイほどの美少女と付き合うことが出来てかつ、俺の義弟になれるのだぞ?」
「それのどこに魅力があるのかわかんねえよ」
「今なら洗剤とプールの優待券もついてくるぞ?」
「新聞の押し売りみたいなサービスあっても付きあわねえよ! つーか、物で釣って付き合うとして、それでいいのかよ?」
「私は風見様と付き合うためなら手段は選びませんわ」

「そうかよ……」
はあ……と、大きくため息をつく。
キース達の側にいるのも疲れるが、アイとレイに挟まれているこの状況も十分に疲れる。
「もうちょっと心休まる場所はねえのかよ……」
「でしたら風見様、どうぞ私の胸の中へ」
「いかねえよ……つーか、もしお前と付き合ったとしたらあいつみたいになりそうだな」
俊介達の騒ぐ声などまったく意に介さず、自分の目には絵里香しか映っていないと言わんばかりの勢いで熱視線を送り続けるキースを指さして言う。
付き合ってもいない今の状態でも、ベタベタと所構わず抱きついてくるアイの事だ、もし恋人同士になろうものなら、あれですら霞むような勢いでベタ付かれるかもしれない。
……想像すると寒気がする。
「いくら風見様でも、あれと同列に扱われるのは辞めて欲しいですわ。確かに、あの男にとっての茜澤様と同じぐらい、私には風見様が輝いて見えますわ。ですが、私はあんな無礼で無節操で無価値な男と違って、立派な淑女ですわ」
「立派な淑女は付き合ってもない男に抱きついたりしないと思うんだがな」
「時間の問題ですわ」
「いつまで経ってもオレの気はかわんねえよ」
こうやって何度も何度も突き放してるっていうのに、一体いつになったら諦めてくれるのやら。転校してきてから今日まで、一度たりともアイからの求愛行動が途切れたことはない。
もちろん、俊介としてもアイのことが嫌いなわけではない。一度自分の在り方が揺らぎ、崩れそうになった時に支えてくれたことには感謝している。それでも、アイのことは友達としか思えなかった。
「つーか今、茜澤様って言ったか？　前はお姉様、とか呼んでたんじゃなかったか？」
初めて絵里香にあった時は、アイは絵里香のことを「お姉様」と呼び、随分親しそうだったはずだ。
……そう言えば、転校してきてからあまり話してる所を見てないな。
「それは、その……もう、お姉様と呼べる間柄ではなくなってしまいましたから」
「？　どういう――」
「俊ちゃん、駄目だよ」
カッター服の袖口を引っ張りながら、千里が小さな声で言う。
「ほら、茜澤さんって、藤原君の……」
「あー……そういや、そうだったな」
茜澤絵里香。
今はキースの交際相手。昔は……藤原レイの婚約者。
つい一月ほど前に色々あって、絵里香はレイからの求婚を断って、周りの反対を押し切り、説得してキースと付き合うことになったのだった。
その結果、キースは見ての通り幸せ一杯になったわけだが、レイは……
「……まあ、俺のことはそう気にしてくれるな。俺の方はもう割り切って、新しい恋を探して見合いの毎日だ。……いい加減うんざりしてきたんだが何とかならないか？」

「話の前と後で言ってることが正反対じゃねえか。つーか、見合いって何だよ?」
「何だ、知らんのか? 見合いというのは男と女が会って話をすることだ」
「いや、誰も言葉の意味なんか聞いてねえよ。そうじゃなくて、何でお前が見合いなんてしてんだよ」
「絵里香との婚約を破棄したせいで、席が空いてしまったからだ。俺は結構いいとこのお坊ちゃんだからな。俺の家と親類になりたい連中がこぞって娘の写真を送り込んで来ているというわけだ。やれやれ、モテる男は辛いな、まったく」
言葉とは裏腹に、どうにもレイの顔には疲労の色が見えていた。見合いで体力を使うようなことはないだろうが、精神的に疲れているのかもしれない。
「疲れてるんなら断りゃいいじゃねえか」
「それがそう言うわけにもいかんのだ。何せ、絵里香との婚約破棄は言ってしまえば俺の我が儘だからな。空いた席をさっさと埋めろと言う父上の言葉は無視できん」
「そんな急ぐ必要があんのかよ? 大体、見合いなんて普通オレ達みたいなガキがやるもんじゃねえだろ」
「生憎と、俺はその〝普通〟に分類されないやんごとなき身分だからな。仕方ない」
レイの言う〝やんごとなき身分〟というのが、冗談でないことはもういい加減俊介も気付いていた。普通の学生には婚約者などいないし、見合いをするような機会もそうはないだろう。
ただ具体的にどんな家の人間かは知らないし、特に知りたいとも思わない。
レイがどんな立場でどんな家の人間であろうと、俊介にとってはクラスメイトであり、友人であることには変わりないのだから。
「まあ、毎日毎日可愛かったり美人だったりする女性と一時を過ごせるのだ。むしろ多くの男子が羨む状況だろう?」
「だったらさっさと相手を決めちまえばいいんじゃないか?」
「……まあ、それが一番てっとり早いのはわかっているんだがな」
声の調子が幾分落ちて、レイの表情に影が差す。
だがそれもほんの一瞬で、すぐにレイがフッと笑みを浮かべる。
「残念ながら俺と釣り合いの取れるような相手が中々いなくてな」
「偉そうな言い方だな、おい。何様だよ」
「無論、俺様だとも」
そう言って胸を張るレイ。
その姿はいつも戯言を口にしている時の物と同じで、だが……どこかほんの少しだけ、おかしく見える。
何がおかしいか……まではわからないが。
それをレイに訊ねるよりも先に始業のチャイムが鳴り、今日も学園での一日が始まるのだった。

アーレント魔法学園とは、魔法使いを養成するための学校である。
日本人であれば誰であろうと魔法を使うことが出来る。
だが、魔法をただ使える人間を日本では〝魔法使い〟とは呼ばない。魔法を専門的に

教える教育機関を卒業して初めて、〝魔法使い〟と呼ばれるようになるのだ。
逆に言えば、例えどれだけ強力な魔法を使いこなせたとしても、教育機関を卒業した証がなければ公的には魔法使いとして認められることはない。
そんな魔法使いの養成を主な目的としたアーレント魔法学園では、魔法を用いた授業の一つに〝実技〟の授業が用意されている。
この授業では、学園内に設置された訓練場にて、二人一組で魔法を用いた模擬戦闘を行なうという、俊介の一番得意とすると同時に、一番楽しみにしている授業だった。
幼い頃より強くなるために鍛えてきた自分の実力を試せる機会。その相手が強ければ強いほど燃え上がり、心震える。戦闘狂と揶揄されることもあるが、その闘争心こそが俊介の強さの根底にあることもまた事実である。
だが……逆に言えば、
「ふっ……まさかこんなにも早く雪辱の機会がやってくるとは思わなかったよ、風見」
相手が弱ければ弱いほど、俊介の闘争心は萎え、やる気は下降の一歩を辿ることになる。今日のように、キースが対戦相手であれば尚更である。
「何でお前にばっか当たるんだよ……たまには健一とかレイとやらせろよ……」
「おや？　ボクに敵わないと見て相手を変えて欲しいと言うことか？　この実技の授業だけが君の見せ場だというのに、随分と情けない真似をするんだな、風見」
「お前のその自信がどっから沸いてくるのか教えて欲しいもんだぜ……」
「言っておくが、ボクを以前のボクと同じだと思わないことだ。絵里香さんを救うべく、藤原の特訓によって鍛え上げられたボクは、もはや君の力を大きく上回っているのさ」
「特訓ってあれだろ。レイにボコボコにされてたやつだろ？」
「あ、あれは特訓中だったから藤原に花を持たせてやっていただけだ！」
「そーかよ」
キースの虚勢と根拠のない自信はいつものことなので、適当に流しておく。相手にするのも面倒だ。
実際、レイとの特訓でキースの力は以前よりも増したというのは嘘じゃないだろう。……が、たかだか二週間ぽっちの特訓で俊介とキースの力の差が埋まるかと聞かれれば……言わずもがなである。
「キースの相手だったらしたいやつがいくらでもいるだろうによ……」
少し周りを見回してみれば、コートの外には待機している男子達が、俊介に向けて熱い声援を送っている。キースを潰せと。嫉妬と怨嗟の混じった黒い声にため息しか出てこない。
「んなこと期待されてもな……弱い者いじめは趣味じゃねえよ」
「このボクが弱者だとでもいうつもりか」
「つーか、実際オレより弱いだろ、お前」
これまで何度かキースと戦ったことがあるが、イレギュラーな一戦を除いて俊介の完勝である。
「ふっ、今は好きなだけ囀っていればいいさ。だが、この戦いの後、君はボクの足下にひれ伏すことになるのだよ、風見！」
「まあ、ちっとは楽しませてくれよ」
俊介がそう言い終わると同時に、笛の音が訓練場に響き渡る。戦闘開始の合図だ。

同じくコートに出ていた他の学生達が戦闘を始める。剣戟の音が聞こえ、勇猛な掛け声が響き、戦いの余波で戦塵が巻き上がる。
「ふっ……では、始めようか、風見(かざみ)!」
「あー、そうだな。好きにしてくれ」
「ッ……すぐにその余裕をなくしてみせるさ。シルフィード!」
キースは腰に結わえたレイピアには手を伸ばさず、ポケットから小さな三体の人形を取り出す。大きさは手のひらに収まる程度の物で、その手にはそれぞれ剣が握られており、背中には四枚の羽が生えている。
「レイがやったつー魔法具(アーティファクト)か。いきなり他人の力を当てにするのはどうなんだ?」
「う、うるさい! 君の銃だって藤原(ふじわら)からもらったものだろう!」
「そりゃまあそうだけどよ」
「と、とにかく! 行くぞ、シルフィード! 同調起動(ゲットレディー)……開始(スタート)!」
キースが右腕を突き出す。その腕にはめられたブレスレットに魔力が流れ込んでいくのを感じる。と同時に、キースの手のひらに乗っていた人形達がゆっくりと動き始めた。
「おっ、動くのか、それ」
「そうさ。シルフィードはこのブレスレットに魔力を流し込みボクの魔力を伝播させ、それをシルフィード本体の魔力と同調させることで意のままに操ることができるのさ」
「へえ……そりゃちょっと面白そうじゃねえか。いいぜ、掛かって来いよ。オレが撃ち落としてやるよ」
「いけ! シルフィード! 風見(かざみ)を切り刻んでしまえ!」
キースの言葉に押されるように、人形達が羽を動かし手のひらの上から飛び出し――
――そのまま真っ直ぐに地面に向かって落下していった。
「……」
「……」
「……おい」
真面目に銃を構えて待っていた自分が酷くマヌケだった。
もっとも、それ以上にキースの方がマヌケなわけだが。
「なっ……こ、こんなはずは! ど、どういうことだ?! この前はちゃんと……」
「あー、聞こえるか、キース」
慌てふためくキースに向かって、コートの外からレイの声が飛んでくる。
「実は一つ言い忘れていたんだがな、その人形だが、人形自体を動かすためにはブレスレットに送る分とは別に魔力が必要なのだ。それを作った時に俺が込めておいた魔力はもう切れているだろうから、自分で魔力を込めなければ使えないぞ」
「なっ……そ、そういうことは先に言え!」
「いやあ、スマンスマン。お前のあわてふためく姿を堪能しようと思ってわざと黙っておいたんだ」
「藤原(ふじわら)ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!!」
「はあ……そうだよな。お前相手にまともな勝負なんかできるわけないよな……」
「はっ!? しまっ――」
戦闘中にあろうことか敵から目を離してレイに怒鳴っていたキースの後頭部を思いっきり殴りつける。キースの体が真っ直ぐ地面に向かって倒れて、そのまま起き上がってこな

くなる。
「……すっきりしねえなあ」
殴った拳にため息を乗せてそのままコートを出て行く。綺麗に後頭部を捉えたから、しばらくは起きないだろう。あんまりにも状態が酷ければ、待機してる治療班がなんとかするはずだ。
「うむ。見事な不意打ちだったな、シュンよ」
「不意打ちじゃねえよ。戦ってる途中で敵に背を向ける方が悪いんだよ」
外で待機していたレイに出迎えられた後、コートの方へ振り返る。あまりにもあっさりと勝負がついた俊介達と違って、他のコートではまだ戦いが続けられている。
ふと視界の端に、倒れたキースの元に寄り添っている絵里香の姿が映る。水系統の魔法使いである絵里香は、キースの治療をするつもりなのだろう。少しして、ゆっくりとキースが体を起こし、絵里香に寄り添われてコートから出てきた。
チラリと横目でレイの様子を見てみると、特に気にしていないのか、あるいは気付いていないのか、特に気にした様子もなく黙ってコートの方を見ていた。

＊　＊　＊

実技の授業は二クラス合同で行なわれ、十分なスペースを取るために前半組と後半組に分かれて戦闘が行なわれる。
つい先程俊介達前半組の戦闘が全員分終わり、続いてレイ達後半組の出番となった。自身の魔術媒介である杖を手に、レイはゆっくりとコートの中へと歩いていく。
レイは俊介ほどこの授業に対する情熱はない。ただ淡々と自分の対戦相手と戦い、倒すだけだ。もちろん、戦いに対する高揚感が全くないわけでもなく、相手が俊介や健一であれば、それはさぞ楽しいものになるとは思っている。
ただ単に、俊介ほど戦いを欲していないと言うだけの話だ。
これは〝闘い〟ではなく、あくまで〝授業〟なのだから。反映される多くの部分は戦績であって、戦闘での健闘ではない。だから、戦いを楽しむ必要はなく、ただ勝てばいい。
一部の相手を除けば、この授業はほとんどルーチンワークのようなものだ。
ただ……今日の相手は単純作業に勝利する、というわけにはいかなかった。
「……まさか、絵里香と当たることになるとは思わなかったな」
「……レイ様」
「できれば様付けはやめて欲しい所だな。少なくとも、この場において俺は一学生に過ぎないのだから」
「……申し訳ありません」
「そう堅くならずに気楽に接してくれればありがたいのだがな」
軽く笑いかけてみても、絵里香の顔には暗い影が落ちたまま晴れることはない。
(まあ、気にするなと言う方が無理な話か。……お互いに、な)
教師の吹く笛の音が聞こえて、周りが騒がしくなり始める。
「さて、では真面目に授業に取り組むとしようか。……とは言え、実戦はまだまだ無理があるだろう」
つい先日この学園に転校してくる前まで、お嬢様学校であるカトレア女学院に通って

いたのだ。義務教育の範囲で魔法使いとしての教育は受けているだろうが、〝魔法使い〟になるための授業を受けてきた者達との実力差は大きい。
「どれ、今日は俺が練習台となってやろうではないか。まずは戦うということに慣れることが重要だ。いくらキースのために転校してきたとは言え、この学園の生徒である以上これからも授業に参加しなければならないのだからな。さあ、絵里香」
「……できません」
ゆっくりと首が横に振られる。絵里香の目は俯いたまま、レイを見ようとはしない。
「俺の立場を気にしているのなら気にするな。さっきも言ったが、ここではただの一学生だ。心配しなくとも、俺に手を出したからと言って不敬罪にはならないぞ」
冗談交じりにそう言ってみても、やはりほんの少しも表情を崩さない。
「申し訳……ございません。私には……できません。申し訳ありません……」
「絵里香……」
「……失礼します」
深く頭を下げて、絵里香はレイに背を向けて逃げるようにコートを出て行く。
「……やはり、そう簡単には戻らない、か」
一人コートに残されたレイの呟きは、誰に聞かれることもなく戦場の怒号に呑まれて消えていくのだった。

＊　＊　＊

「お兄様……」
俊介の隣で、レイと絵里香のいるコートの方を見ていたアイが悲しげに言葉を零した。
レイを置いて、一人コートを出てきた絵里香は一瞬だけこっちを見たものの、話しかけてくることはなくキースの方へと歩いていく。
「なあ、アイ。お前はやっぱ怒ってんのか？　茜澤のこと」
少しだけ考えるように黙り込んでから、アイはゆっくりと口を開いた。
「茜澤様との婚約破棄を決めたのは、他ならぬお兄様ですわ。ですから……私が茜澤様に対して怒るというのはお門違いですわ」
「そうなのか？　けど、転校してきてから話してるところとか見てねえし、それに『茜澤様』なんて他人行儀な呼び方してるし――」
「私は……茜澤様のことが、大好きですわ」
俊介の言葉を遮って、アイはそう口にする。
嘘をついているような素振りはなく、それは心からの言葉だったんだろう。……だが、アイの表情は暗い。
「だからこそ……私は茜澤様と親しくすべきではないんですの」
「……意味わかんねえよ」
絵里香のことが好きだというのなら、仲良くするのに何の不都合があると言うんだろうか。絵里香がアイのことを煙たがるというのならわかるが、むしろ向こうにしてもアイやレイに対して負い目を感じているから仲良くできないでいるように見える。
「茜澤のことが好きだっつーんなら、素直にそう言えばいいじゃねえか。それで丸く収まるんじゃねえのか？」

「そんなことを言っても、茜澤様に迷惑がかかるだけですわ」
「迷惑って……どういう意味だよ？」
「それは……」
「そのぐらいにしてやってはくれないか、シュン」
いつの間に戻ってきていたのか、レイが会話に割って入ってくる。
「アイにはアイの事情という物があるんだ。あまり追求してくれるな」
「……お前は、いいのかよ？」
アイとレイと絵里香は、元々幼馴染みで仲が良かったと聞いている。それが今は、お互いに話すことも満足に出来ずにいる。
「自業自得だからな。こうなってしまったのは、俺が自分で種を蒔いたからだ。その結果に対して文句を言った所で、見苦しいだけだ」
「そうかよ……」
レイとアイがそう言う以上、もう俊介に言えることはなかった。レイ達三人のことに関しては、俊介は部外者に過ぎない。本人達が納得してしまっているなら、何を言った所で仕方ないのだろう。
「ただいまー、俊ちゃん。……？　何かあったの？」
「随分と空気が重いな。どうかしたか？」
「……何でもねえよ、健一」
「何でもないですわ。そんなことより、丁度いい所に戻ってきましたわ、二人とも」
さっきまでの重苦しい空気などまるでなかったかのように、アイがいつもの調子で声を上げる。多分、わざとそうやっているんだろう。
「？　何か用か？」
「貴方如きに私が用などあるはずがないでしょう」
「ついさっき、いい所にもどってきたと言われた気がするんだがな……」
アイの物言いに疲れたようにため息を吐きながら健一が返す。
「ですが、どうしてもと言うのなら一緒に連れて行ってあげてもよろしくてよ？」
「……話が見えん」
「馬鹿ですの、貴方？」
「いや、今ので話の全体像が浮かべられるやつはいないだろう」
「なあ」と、目で同意を求められたので頷いておく。かくいう俊介も何の話をしているのかさっぱりわかっていなかった。
「仕方ありませんわね。お馬鹿な貴方のために、わかりやすくかみ砕いて説明して上げますわ。いいですこと？　明日は休日ですわ」
「ああ、そうだな」
「ですから、みんなで遊びに出かけるんですわ。私とお兄様と風見様、ついでに貴方と千里の五人で、繁華街にでも行きませんかと誘ってあげているんですわ」
「……って、ちょっと待て、何でオレが行くことになってんだよ」
「風見様あるところに私ありですわ！」
「答えになってねえよ！　つーか、明日は無理だ」
「ええっ!?　どうしてですの？　……はっ!?　まさか、他の女とのデートが……」
「ねえよ。……まあ、他の女ってのはあってるけどよ」

「何ですって!?　い、一体誰と！　誰とデートに出かけるのですか！」
「えっと、わたしだよ、アイちゃん」
小さく手を挙げて主張する千里。その千里に、アイが非難がましい目が向けられる。
「どういうことですの、千里！　まさか……兄妹で禁断の恋を……ッ」
「いや、血は繋がってないから別に禁断というわけでもないだろう」
そう口にした健一を、アイがキッと睨み付ける。
「そんなありきたりなツッコミは必要ありませんわ！　重要なのは、風見様と千里が二人で出かけるということなんですから！」
「えーっ、でも、わたしと俊ちゃんよく一緒にお出かけしてるよ？　お買い物に行ったり。ねえ、俊ちゃん」
「あれは付き合わされてるっつーんだよ……ったく、いつもいつも長々と選びやがって。待たされるこっちの身にもなれっつーの」
「ぶーっ。だったら俊ちゃんが選んでくれたらいいのに。俊ちゃん、いっつも『あー、似合ってる似合ってる』しか言ってくれないんだもん」
「な、なんて羨ましい……私だって、風見様に『ああ、アイ……よく似合ってるよ。まるでその服は君に着られるために生まれてきたようなものだ』なんて、言ってもらいたいですわ」
「んなキースみたいな台詞、誰が言うか！」
「と、とにかく！　そんな風見様と二人っきりだなんて羨ましすぎる状況、神が許してもこの私が許しませんわ！」
「うん。でも、ごめんね。明日は、わたしと俊ちゃん、どうしても抜けられない大切な用事があるの」
「だから、デートなど私が許しませんと言ってますわ！」
「ううん、違うの。明日はね、遊びに行くんじゃないんだ。あのね、明日は――」

「――わたしの本当のお父さんとお母さんの命日なんだ」

「えっ……」
その一言で、それまでまくし立てながら千里に詰め寄っていたアイが動きを止めた。おずおずと千里の顔を見るアイに、千里は優しい笑みを浮かべる。
「だから、ごめんね。明日は駄目なの。あ、でも、俊ちゃんだけでも――」
「そういうわけだからな。オレ達は墓参りだ。だから、明日は無理だ。……悪いな」
最後まで千里が言うよりも先に、俊介が割って入る。千里が何と言おうと……その日だけは千里を一人にするつもりはなかった。
「ごめんね、アイちゃん」
「なっ、そ、そんな……あ、あの……」
「まあ、こっちのことはあんま気にすんな」
失言だったとでも思っているのか、戸惑っているアイにそう言って、続ける。
「それより、遊びに行くっつー話だけどよ、明後日ならオレ達は大丈夫だぞ」
降って沸いた話ではあるが、別に遊びに行くこと自体は悪くない。
特に、今のレイにとっては。

見合いにしろ、絵里香との仲にしろ、面倒なことが立て続いているんだ。少しは息抜きに遊んだっていいだろう。
だからそう提案してみるものの、
「すまん。明後日は俺の方が無理だ。残念ながら見合いの予定が入れられていてな……」
今度はレイの方の都合が悪いらしい。何ともタイミングが悪い。
「まあ、折角のアイの提案だ。明日は俺とアイと中田の三人で楽しんでくるとするさ」
「俺は行くと言ってないんだがな……まあ、構わんが」
「ならばそういうことでいいな、アイ」
「あ、はい……あの、千里……」
「そんなに気にしなくても大丈夫だよ、アイちゃん」
「……」
まったく影の見えない笑みを浮かべた千里に、逆にアイは返す言葉を失ったか黙り込み、そのまま俊介達は授業の終わりを迎えるのだった。